

詩集『ある北方的な風景』 工藤正一（中西書房復刻版）を読んで

石川の詩人・工藤正一の情念

瀬川紀雄

一九〇七年石川（弘前市）生まれの工藤正一は、青森市にある師範学校卒業後、鯹ヶ沢や板柳町の小学校に勤務。そして、むつ市の小学校に赴任してまもなく急性盲腸炎で逝去。二十三歳であった。翌年、三上斎太郎ら友人たちにより遺稿詩集『ある北方的な風景』が刊行された。

工藤正一 の存在を初めて知ったのは一九七五年に北方新社から刊行された『青森県詩集 上下』でであった。当時上下巻で五千元位だったと思うが、大学を卒業し運よく就職できた県庁の合同庁舎（弘前）に勤めていた時であり（上級職員で手取り七万円くらいだったろうか）、父が北方新社の初代代表であった大学時代からの文学仲間の先輩に勧められ購入し、名も知らない詩人だけを読んでいった。そして、石川に詩人がいたのに歓喜した。しかも夭逝。興奮して読んだものだった。

小生は石川の隣の集落生まれであり、石川の大仏公園付近は恰好の遊び場だった。親父のトラクターに乗せられて石川のすぐ南にある小金崎の斎太郎邸の玄関先まで行ったこともある。序に、高校三年の頃だったろうか、同じ石川の小説家・栗林セツ宅へは同期に誘われ訪問し、ご本人を拝顔したことがある。

大仏公園の上方に「文学の森」もある。弘前民主文学が建立した津川武一、作間雄二の他、近年逝去された阿部誠也さんと、石川ご出身だったかもしれない短編集等未読な兵頭勉氏、そして三上斎太郎の碑が並んでいる。退職後、尾開山付近にはやや珍しいラン科二種を始め花と虫、ここでもうやくマクロで撮れた少年時代の思い出であるニホンザリガニと山椒魚も含め、いまだ時々訪れている。そして「文学の森」に敬意を表しては、展望の効くそこから岩木山と畑の風景を時々撮っている。石川も文学所縁の地となったことを喜びながらも、実は小生の隣村は平川市になのであった。が、かつては岩館として一緒だったのに救われようか。とにかく、われらが工

藤正一なのだ。

紙面で、鳴海要記念陶房館が「詩集「ある北方的な風景」によせて」展を開催していることを知り見学に伺ったところ、本詩集も販売されており入手した次第である。本展主催者である松田左衛子・耕一郎ご夫妻ともいろいろお話ができた大変勉強になった。ご夫妻は小生とほぼ同年であった。松田夫人は正一の兄の孫にあたる方で、小生と同年であり、高校時代は弘南電鉄の新石川駅から通学していたことになる。詩集は耕一郎氏が版元を探ってご尽力された上での手づくりの復刻版であった。

さて、早速詩集を読み、前半の多くにシュールな感覚を覚えその表現に驚く。二十歳少々なのに技巧的にも既に熟成したものを覚えた。昭和のごく初期である。大正十四年は詩史上近代から現代へのエポックの年とされていようか。萩原恭次郎の『死刑宣言』などが刊行された年である。この年に西脇順三郎が英国より帰朝したが、『超現実主義詩論』が刊行されたのは昭和四年であるから、正一にシュールを観るのは早計かもしれない。むしろダダ的なものかもしれない。プロレタリア文学とも関係があるだろうから、ロシア未来派的なものかもしれない。日本未来派宣言運動は大正十年だった。いずれにせよ斎太郎ら友人たちの詩観や文学的時代背景も気になるところだが、今のところ残念ながら不勉強なままある。清藤祿郎『ふるさとの詩と詩人』は読んでいるが、もっと詳細を論じている船水清『ここに人ありき』についてはそれも展示されていて初めて知った次第である。他に小野正文、工藤達郎、佐々木達司なども素人ながらに本書を味わっていくしか能がない。

「ある北方的な風景」

変屈な脳髓の皺に溜った感情、

眞冬の紙片をへらへら散らし、

瞳に映った白晝まひるの風景。

澁みのある透明な太陽。
皮膚のない生活。

詩集の標題でもあるこの詩は、雑誌「改造」の懸賞詩で佳作入賞した三編のひとつである。入賞知らせが枕元に届いた時には、正一は苦しみの只中であつたという。他の入賞作として「兵士」がある。短期間だが二度の入賞歴がある。詩「風景」と合わせて読まされてしまう。

「兵士」

白い舗道に兵士がとまつた。白い高層建築が横擲りに
兵士を浚つて立つた。兵士は引つ憑かれたやうに青い空
に向つて発砲した。つづけざまに。

「風景」

男は白い葦を喰はえて歩ゐてゐる。季節はづれの蝶
が男と竝んでゐる。空は眞赤に血を流してゐる。男は總
身血を浴びながら、季節はづれの蝶と泣いてゐる。

雪ではないとして、ともに白い舗道とビル。そして青い空。理由なきそれだけ故の狂気的あるいはその逆の発砲か。空と男は夕日ではなくまさに血の赤なのだろう。空は撃たれ、時間を越えた連射は自らをも本来の標的に、と恣意的につなげ。

そんな自棄的で暗鬱な内奥をシュールの方法で強めているように思われる。まさに詩ならではの表現であろう。全編にそれが通底しているように思われる。詩「高原孤賦」で歌っているように、雨がけぶる遮る一本の喬木もなく茫々と果てしない高原、そんな地点から出発しようと。そこには谷底から陰気な空気が昇り、そこでは錆びた沼が落葉松の間に寂しく光るのや地平のほとりに黒ずんだ邑が見え、そこから辿っていく道もない。そんな高原なのである。現象学的還元とかデカルトの懷疑のような、根源的な出発に似た何かを思念させてくれる。荒涼とした北方性故に可能なのだろうか。

それは詩「川には水が流れてゐる」にも通ずる。裸木の雑木の中どうしようもない落莫した風景を歩き、干枯れた草に横たわる、屍の己の上を蕭蕭と秋風が吹く。空気の陰鬱な臭いが漂う中、「ばふばふ」と土壌に腐っていく。落葉が腐っていくようにだろうか。一鞭うつものは打てーと、地の底からうめくような声を聞く。「おお、おれの前ではゴオゴオと川の水が流れてゐる」川は絶えず下流に水を流し、その間断なき働向に発止と打たれる。しんしんとした森の流れにねちねちした執拗を覚え、世界のひたすらの意欲に空起き上がるのである。散文的に書けはそうなるが、詩では文章の流れにひよいひよいと力強いリズム感があり、そのリズムが起き上がるのを助成しているように感じられる。この辺の表現の上手さにも感嘆させられる。

実は、幾編か読んですぐ、退職後に秋田雨雀と鳴海要吉の同年代の頃の詩集を比較して読んだことを思い出していた。前者の『黎明』はともかく、後者の『乳涙集』を何で読んだのか記憶にないもの、とにかく両者とも感傷とも異なる極めて情緒的というかあまり興味を持たなかったことを。本詩集はそれらより二十数年経るが、斬新性と内容の濃密さ、自己批判の中にも強烈な詩魂というものに共感でき、すこぶる今日的なものを覚えつつ。

そんな中、一見情緒的で平素的でありながら底から響く重みも感じられる作品も幾つか目立つ。

「無 題」

今夜も宵宮なので、

太鼓の音がひっきりなしに響く。

街は雨にけぶりながら、

夕暮の端をひつつかんである。

発動機船のゆくのもさびしい。

・
・
・
・
・

どうしてこんなに沈むんだらうと思つて、

机について海を見てゐると、

太鼓がぼろん、ぼろん、海の底から鳴る。

一つ置いて「太鼓」という詩が続く。確かに、気取った表層的な情緒ではなく、男性的な心底からの叫びに近いものを覚えてしまう。それは太鼓の打つ音のように「ぼろん」と深く響くものなのだ。

冬のくろづんだ空から、

無数に落ちかゝる白い雪

それでさへ私の心は重いのだ。

このはてしない白の連鎖、

ビルデングにかかった女の顔、

あまりにも単色に蓋はれた風景。

そして孤獨の靈魂のなかに、

ぼろん、ぼろん太鼓がひびく。

この陰鬱な冬の北国に、

凍え立ちすんでゐる私のように、

おお、ぼろん、ぼろん、太鼓が鳴つてゐる。

ビルデングにかかった女の顔というのは、雪がビルデングに付着して顔のようだというだろうが、冷たい死のような女性、太鼓の音に崩れそうな顔を連想してしまう。雪さえ重く感じ、しかもそれが限りなく連鎖し落下してくる。

それだけに、自然を描いた詩には個人的にも安堵する。

「山村の眞昼」

絨^{ほそ}き雨も息^やみ…、

栗の葉はあざやかに空間を刺繍し、

六月の眞昼、

ああ、翠緑^{みどり}を探ねて幽情を深め、

健やかな花に美想を求め、

(六月といふのに鶯も鳴いてゐる)

蛇^{とぐろ}が彩管を巻いてゐても、

堆肥^{たいひ}が鼻をついても、

山村の眞昼、

噪心はおだやかに和む。

また、ひっそりとした休日の兵営で真昼にカラマーゾフ兄弟を読みながら、カーテン越しの青草の匂いやアカシアの花が散る光景を歌い、遠き日々を追憶し未来を夢想する姿が痛々しくも日常の中の普遍を看取しているようで、熾烈な作品が多だけに懐かしき静寂を共有する思いにさせられる。これこそ正一が最も求めていたものかも知れない。詩「山の中で」がその最たる境地かもしれない。

あをむけになつて、

眞空な大空をながめて、

太陽をあびてゐる。

眼を半分つむつてゐると虹ができた。

がらんとした山中で一人寝そべつてゐる。

どうということのない、よく目にする内容だが、詩集の最後の方にある詩であり、それまで読んできた厭世的な青年の不安と、そこに巣くう若い力の漲った希望がぐんぐん湧出してきて肯定を覚えるのである。上京して文学に専念することを決意したのだろうか。それだけに急逝が悔やまれる。

詩「出発」は希望に満ち明るい。「反逆の歯をむいて立ち上がれ」と。

俺の頭でもろもろの思想が戦つてゐる。

もろもろの生活がうごめいてゐる。

だが、俺はそこから新しく出発するのだ。